認知症キッズサポーター

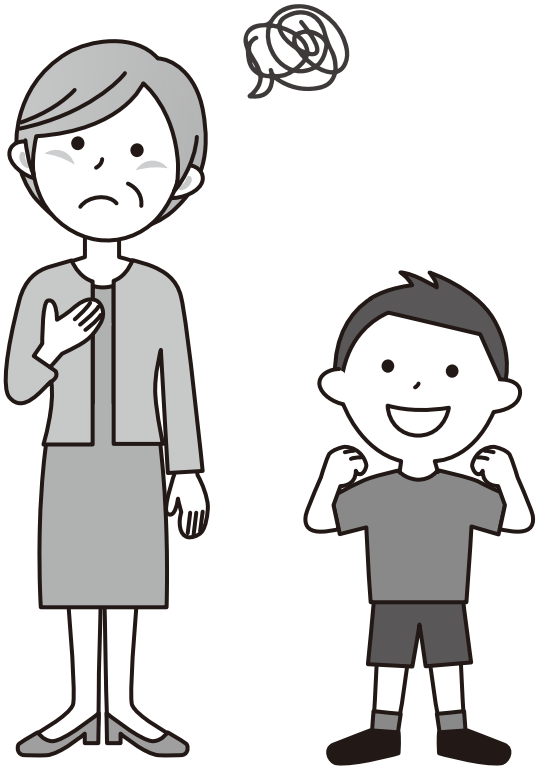
一宮市立丹陽小学校五年　吉田　旭冴

「認知症サポーター養成講座」に参加してぼくは、「認知症キッズサポーター」になりました。「認知症キッズサポーター」とは、認知症について正しく理解し、認知症の人やその家族を温かく見守り、声かけやちょっとした手助けができる小学生のことです。

認知症は、さまざまな原いんで脳の細ぼうが死んでしまったり、働きが悪くなったりするためにおこる脳の病気によるものです。ものわすれがひどくなったり、できていたことができなくなり、今までのような生活がおくれなくなります。

認知症の人への接し方として、「おどろかせない・いそがせない・相手がいやだと思うことを言わない。」認知症の人は、「後ろから急に話しかけられると、だれだかわからなくてびっくりします。正面からゆっくりと話しかけてあげる。」元気がなくなったり、とつぜんおこりだしても、やさしいことばをかけてあげる。うまくしゃべれないだけで、「もしかしたら何か言いたいことがあるかも」と相手の気持ちを考え、日ごろからのあいさつが大切。認知症とは、どんな病気なのかと、色々と学びました。

今のぼくは、周りの人に言われてから動いていることが多く、こまっている人がいても気付かず、すぐに助ける事ができていません。

認知症になると、つらいこともあるけれど、家族や友だちがいるとつらい事も乗りこえる事ができると、認知症の方から教えてもらいました。

ぼくの家族にも、認知症の人がいます。認知症の人への接し方についてちゃんとできているか分かりません。ぼくができない事もたくさんあります。でも認知症の人を直接助ける事だけでなくサポートをしている家族やまわりの人を助ける事も「認知症キッズサポーター」の役目だと学び、これからは、周りを見て、「何をしようとしているか？助けが必要か？」をぼくなりに考え、家族や身近な人を見守り、こまっている人に勇気を出して声をかけて助けてあげたいです。それが「認知症キッズサポーター」としての、ぼくの役目だと思います。